

\*\*\*\*\*

金城 朱美 (かねしろ あけみ)

\*\*\*\*\*



【書名】車輪の下

【著者】ヘルマン・ヘッセ (高橋健二 訳)

【発行】新潮社 (新潮文庫)

高校生の時、『車輪の下』が読書感想文の課題に出た。いつものようにいやいや読むことになるかと思ったが、その時は違った。これが私の人生を方向づける本になった。当時、いろいろと悩み、学校の勉強にも受験勉強にもなかなか手がつかず沈んでいたときに、この小説に出会い、主人公のハンス・ギーベラントの姿が一部、私と重なり共感を持った。英語が好きだったので、なんとなく英語の教師になりたいと思っていたが、この本を原語で読みたくなったので、ドイツ語を学ぶべくドイツ文学科に入学した。しかし、入学後はドイツの文化とメルヘンに興味を持ち、ヘッセ研究を行うことはなかった。修士課程修了後ドイツで留学し、長期研究生活を経て帰国してから、大学の教壇に立つことになるとは、あの頃に想像したこともなかった。人生、どこでどうなるのか分からない。みなさん、いろんな分野の本を読んでください。学生生活が読書を通じてより豊かなものになりますように。

【書名】香水 ある人殺しの物語

【著者】パトリック・ジュースキント (池内紀 訳)

【発行】文藝春秋 (文春文庫)

本書はドイツ人作家の長編小説であるが、舞台は18世紀のフランス、パリである。その頃、人びとは毎日入浴する習慣もなければ、下水道も整備されておらず、ましてやゴミの収集もなかった。そのため、町中、そして家の中も想像を絶するような悪臭に満ちていたはずで、不衛生極まりない状態であった。臭さの程度だと王様も貧民も変わらなかった時代に、香水が発明された。

ある日、悪臭の立ち込める魚屋で、ひとりの女が子どもを産み落とした。女はこの子も死産だと思い、その場を去ったが、今回は死産ではなく子が生きていた。女にはこれまでの嬰兒殺しの余罪があり処刑された。子は乳母に育てられたが、乳母たちに嫌われた。なぜならこの子は赤ちゃん独特の匂いもしなければ、何の匂いもしなかったので気持ち悪がられたからだ。しかし、この子の臭覚は異常に発達しており、モノの名前も臭いで覚えるほどの変わ

り者だった。成長し、パリの香水店で働くことになり、一見、天職に就いたように見えるが、実は、彼は特定の匂いを抽出したかったがために、香水師になろうとしていた。その匂いとは？

本書の匂いの描写が特に優れており、読むだけで匂いが再現される。科学技術で匂いを作り出せるが、文字でも匂いを創出できることが分かる。人と匂いの関係、ひいては恋愛について考えさせられる作品で、思わず自分の鼻をもぞもぞさせながら読んでしまう。現代風というならば、においフェチとかいう類の男の物語である。

**【書名】** 成功する人は缶コーヒーを飲まない

**【著者】** 姫野友美

**【発行】** 講談社（講談社＋α新書）

大学生になり、一人暮らしを始めた人もいれば、余暇はバイトで忙しい人もいるだろう。そうすると食事にお金をかけようとしなかったり、食事に時間をかけなかったりする人がいても何ら不思議ではない。これまでの人生で、一番不健康な生活を送っている人も少なくないであろう。勉強するにもバイトするにもサークル活動するにも、ましてや社会に出てからも、必要なのは「体力」である。私は健康科学の専門ではないけれども、身をもって体力の重要性を感じているので、ここで強調しておきたい。体力がないと元気もなくなり、何事もうまく回らず気が滅入ってしまう。体力を維持するためには、運動することも欠かせないが、まず健康な体を作るために日々の食事に目を向けてほしい。食生活や栄養に関する本は巷にあふれているが、あえて本書を選んだのは読みやすく、テーマが広範囲にわたり、またいろいろな情報をつまみ食いすることで、食の大切さが分かる本だと考えたからだ。もちろんすべてを実践するのは難しい。信じられない内容もあるかもしれないので、疑問を持てば自ら自主的に調べてほしい。よりよい学生生活を送りたい人は、是非この手の本を一冊は読んでみて、自分の食生活について一度見直してほしい。

体は資本。何事にも根気よく取り組めるように大学生の間に良い食習慣をつけておけば、将来得することは間違いないだろう。でも、ストイックになり過ぎないように、ほどほどに。